九州産業大学国際文化学部紀要　第13号 33—60（1999）

北アイルランド紛争と映画

——ケン・ロウチ『隠された議題』論

河　野　賢　司

（1998年12月2日受理）

ニール卿「アイルランドは素敵な土地なんだがねえ，
アイルランド人さえいなければ」（87'58"-88'04"）

1．はじめに

イギリス人映画監督ケン・ロウチ（Ken Loach, 1936-）は，隼（kestrel）と少年の交流を描いた代表作『ケス』（*Kes*, 1969）や『リフ・ラフ』（*Riff-Raff*, 1990），『レイニング・ストーンズ』（*Raining Stones*, 1993），『大地と自由』（*Land and Freedom*, 1995）が近年になって相次いで日本公開され，労働者階級を描く硬派の社会派監督として高い評価を得てきた。最新作『私の名はジョー』（*My Name Is Joe*）は1998年のカンヌ映画祭参加作品として話題になった。短編を除く劇場版作品としてロウチ監督の8作目にあたる『隠された議題』（*Hidden Agenda*, 1990）は，北アイルランド紛争を扱う政治的な問題作であるが，残念ながらまだわが国では劇場未公開かつビデオ未発売である。拙論では，この映画のビデオ[1]（108分）の分析を通して，1980年代の北アイルランドの紛争状況やそれに対応するイギリスの政治の問題を考察する。知名度の高くない映画であり，「構成がぎこちなく，視聴者にかなりの背景知識を要求する」[2]とも評される作品であるだけに，まずその粗筋を簡単に記述する必要があるだろう。

2．映画『隠された議題』の梗概

舞台は紛争の緊張の続く1980年代前半（文脈や台詞からあえて特定すれば1984年）のベルファースト。IRA監視の英軍装甲車が市街地を哨戒し，身柄拘束を優先せず発見次第「撃ち殺す」（"shoot to kill[3]"）強硬方針を警察当局が打ち出して，いわば北アイルランド全土が家宅捜査下に置かれ震撼していた時期である。映画は，上空から

みた緑の北アイルランドに続いて，プロテスタント側の祝祭行事の群衆で埋め尽くされた首府の大通りの場面から始まる。国際アムネスティ機関の賛助で，4名の人権問題調査団が北アイルランドでの囚人虐待の実態調査に訪れている。その一員のアメリカ人弁護士ポール・サリヴァン（Paul Sullivan）は，1本の盗聴カセット・テープのコピーを，変節したイギリス諜報部員ハリス（Harris）から入手する。虐待が確認された旨の調査報告の記者会見を終え，帰国する当日早朝にハリスに電話連絡したポールは，テープ返却のためハリスとの密会に単身出かけるが，別の案内人モロイ（Frank Molloy）の車に同乗しているとき，尾行してきた対テロ秘密警察隊（S.S.U.:Special Support Unit）から警告なく銃撃を浴びて射殺され，カセット・テープも奪われる。アメリカ人の人権擁護派の弁護士殺人に当惑したイギリス政府は，事件の調査員2名を急遽ベルファーストに派遣する。ロンドン警視庁刑事部（C.I.D.:Criminal Investigation Department）のピーター・ケリガン警察副本部長（deputy chief constable Peter Kerrigan）とトム・マックスウェル警視正（chief superintendent Tom Maxwell）である。二人は，人権問題調査団員でポールの恋人でもあるイングリッド・ジェスナー（Ingrid Jessner）やモロイ未亡人の協力を得て，事件に直接関与した警察官（ケネディ巡査部長），指示を出した上官（フレイザー警視），ついには北アイルランド警察署長ブロウディ（Brodie）らの取り調べを進め，やがて事件の真相――労働党政権転覆工作をはじめとする陰謀がサッチャー政権の中枢にまで及んでいた事実を突き止める。しかし，車内に残された9ミリ銃弾付き警告文や，IRA系のパブ内での盗撮写真などをネタに，イギリス政府や諜報部高官はケリガン警部に恐喝まがいの圧力をかけ，ついにケリガンは真相の公表を断念して帰国の途につく。一方，ジェスナーは，ハリスから盗聴テープの別のコピーを独自に受け取ることに成功するが，受渡し直後にハリスは秘密警察に拉致され，IRAの犯行に見せかける膝撃ち刑を受けた後で射殺されてしまう。ケリガン警部の公的支援も得られぬまま後に残されたジェスナーは，なんとかこの陰謀の暴露の道を模索して，公衆電話に走る…。

3．モデルとされる実在の事件や人物

マルキスト作家ジム・アレン（Jim Allen）が脚本を担当したこの『隠された議題』は，フィクショナルな作品である。しかしながら，ケン・ロウチのインタヴュー［後述5-(A)］でも明らかなように，映画の内容は『ストーカー報告書』から大きな影響を受けている。『ストーカー報告書』と言っても，昨今話題になることの多い，特定の人物を付け回す偏執的犯罪者に関する報告書，ではない。

(A) 『ストーカー／サンプソン報告書』について

『ストーカー報告書』とは，1985年，グレイター・マンチェスター州の警察副本部長（deputy chief constable of Greater Manchester）だったジョン・ストーカー（John Stalker）が作成した中間報告書で，1982年アーマー州（Co.Armagh）で起きた射殺事件をめぐって，北アイルランド警察がIRAテロリスト容疑者を逮捕を目指さずに最初から「撃ち殺す」（“shoot to kill”）方針を実施していたか否か，その実態について調査したものである。北アイルランドの1982年はとりわけ不穏な時期で，9—12月の4か月間だけで紛争に関連して47人もの死者が出たのだが，ストーカーの調査対象となったのは次の3つの事件である[4]。

①11月11日深夜，警察の道路封鎖を突破した車が監視していた警察の一斉射撃を浴び，乗っていた3人の男（Gervaise MaKerr, Eugene Toman, Sean Burns）が死亡した。車内からは銃器類はまったく発見されなかった。

②11月24日，Lurgan近郊のBallyneeryの干し草置き場でMichael Tigheが射殺され，Martin McCauleyが重傷を負った。小屋から押収された3丁のライフル銃は，戦前の年代物で銃撃不能のものだった。

③12月12日，アーマー郊外の宅地で，Seamus GrewとRoddy Carrollの2人が射殺された。やはり車内からは銃火器類は発見されなかった。

1984年5月ベルファースト入りしたストーカーは，調査過程で北アイルランド警察から上述の事件に関係する録音テープの提供を拒否されるなどの抵抗にあったものの，中間報告書では上記6人の犠牲者（うち4，5人がIRAメンバー）が違法に殺害され，しかもその行為に上官が関与したのは確実だと述べている。（しかも，北アイルランド警察からアルスター公訴局長官（Ulster's Director of Public Prosecutions）へのこの報告書上申が遅滞したことも世論の批判を浴びた。）報告書発表後も調査はなお続行されたが，1986年5月，ストーカーは突如告発されて，この任を解かれる。マンチェスター在住の宅地開発業者ケヴィン・テイラー（Kevin Taylor）からの接待の見返りに便宜供与したとされる職権濫用容疑だった。北アイルランドでの以後の調査はウェスト・ヨークシャー州警察本部長（chief constable of West Yorkshire）コリン・サンプソン（Colin Sampson）に6月6日より引き継がれ，サンプソンは同時に，ストーカーの職権濫用疑惑の調査も担当した。ストーカーにかけられた容疑の申立ての主体や詳細は明確でなく，様々な憶測を呼んだ。唯一確証のあるものは，ストーカーが知人たちを私用でパトカーに乗せて送った事実程度である。問題の録音テープはサンプソンには提供され，ストーカーも8月22日無実の罪を晴らしたが，翌年5月に

彼は警察を早期退職し，事件に関してしばらく沈黙を守ったのち，1988年2月ロンドンのハラップ社（Harrap）から自著『ストーカー』（*Stalker*）を刊行した。この著作のなかで最も重要な点は，結局「撃ち殺し」方針はなかった，と結論づけていることである。他方，その同じ年に公表された『サンプソン報告書』は，一部には弥縫的（a whitewash）との批判もあったが，北アイルランド警察の下官数名への懲戒処分の必要性を訴え，実際同年7月には20名が処分を受けた。翻れば，1982年暮れに勃発した3つの射殺事件からちょうど6年が経過していたことになる。

ケン・ロウチ監督の『隠された議題』は，この『ストーカー報告書』に直接的な着想を得たもので，映画の展開から見て，〈ストーカー＝ケリガン〉のモデル図式を想定してよい。ケリガンの刑事歴は映画の台詞では26年と設定され(90'00")，ストーカーの刑事歴も同じく26年である[5]。

一方，映画完成2年前に出された最終報告『サンプソン報告書』の内容は映画には全く生かされていない。後任者サンプソンの役割を果たすべき同僚マックスウェルはキャリア組警官の保身のため臆病風に吹かれ，ジェスナーは体制の外側の一介の活動家にすぎない。上層部の責任追及を怠り下官の処分だけの骨抜き調査に終わった『サンプソン報告書』をケン・ロウチはもともと否定的にしか評価せず，映画に取り込むに値せず，と判断したのかも知れない。

映画の中では，記者会見の席でジェスナーが，1969年から1980年にかけて北アイルランド警察（RUC）やアルスター防衛軍（UDR），イギリス軍らの治安当局によって少なくとも130人が殺され，そのうちの半数がテロ活動とは一切無関係な一般市民であったという数字を挙げて（9'25"-40"），〈撃ち殺し〉方針の存在を確認している。（ストーカーが調査対象にした1982年の一連の射殺事件以前の統計であることに注意。〈撃ち殺し〉は70年代からあったというのが，ロウチ監督の主張であり，もともと〈撃ち殺し〉という表現の端緒は1972年のある政治家の演説とされる[6]。）その声明に対して，武装蜂起状態においてはイギリス政府としても必要な方策を講じる権限があるのでは，という記者からの質問に，ポールは「イギリスは世界から民主国家と見なされており，われわれは証拠書類に基づいた報告書を提出するのだから，イギリス政府がきっと対応してくれるだろう」（9'54"-10'10"）と，（当て擦りなのかもしれないが）かなり楽観的な見通しを述べている。皮肉なことに，そのポールが射殺された事件を伝えるテレビ・ニュースでの警察発表は，「午前6時15分，ダンギャノン近郊の検問所において警官に向かって猛スピードで突っ込んで来た車に警察が発砲した」という全くのでっちあげだった。同じニュース番組で，ワシントンのイギリス大使館前の抗議デモ映像を「IRA支援者，すなわち暴力集団に慰安と武器を提供する人々」(23'15"-22") と呼

んだのは保守党の北アイルランド・スポークスマンのアレック・ネヴァン（Alec Nevin)だった。こうした政治家がイギリス政治を陰で牛耳っている以上，ロンドン警視庁の調査団ではなく，国際的独立調査団でない限りは信頼できない，「なぜなら過去13年間，たくさんの調査が行われてきたが，なにも変わりはしなかった」(25'00"-06") というフランス系調査員アンリ(Henry)の悲観的な言葉は正確な予言であった。一方，北アイルランド警察署長ブロウディに言わせれば，「たしかに北アイルランド警察は秘密工作を行っておるが，IRA とて同じだ。ベーコンをうちへ持って帰るためには豚を殺さねばならんのだ！」(62'10"-17")——これが警察当局のトップによる，〈撃ち殺し〉正当化のための比喩である。

(B) 陰謀工作について

標題『隠された議題』が暗示するものは，変節した諜報部員ハリスが隠し持つ録音テープのなかの謀議，すなわち，イギリス諜報部とアメリカ CIA による労働党内閣打倒の陰謀工作である。証人として元軍人 Fred Holroyd を adviser に迎えて映画は制作されたが，ハリスの語る諜報活動の実態を以下に引用し，陰謀の全容を見てみよう。なお［ ］内はジェスナーとケリガンの割込み台詞である。

「私は MI6，のちに MI5[7]に徴用された軍諜報部員だった。われわれの表向きの名称は〈情報政策部隊〉(Information Policy Unit) だった。公的な職務はメディアと連絡をとり，PR 番組を準備することだった。独自の印刷機を持っていて，共和派の筋から出たと思わせる文書を偽造した。メディア，つまり新聞，雑誌，テレビ向けに資料を提供した。必要と思われる資料ならなんでも，だ。話をでっちあげ，真実を漏らし，嘘を漏らし，半面の真実を漏らした。われわれは誰に対しても責任を負わない。首相，議会，裁判所，英国国民だろうと誰にも。みんな同じことだ。操作されるために存在したのだ。1974年選挙のとき，われわれの任務は次第に政治的になり，MI5 が事態を仕切っていた。われわれの長期的目標は打ち捨てられた。暗殺部隊，賞金稼ぎに新たな重点が置かれた。1970年代，保守党が腐敗し分裂した。保守党党首のエドワード・ヒースが1974年の炭坑ストに屈服する様をみるにつけ，極右からの新しい指導者を模索していた。そこでわれわれはヒースの私生活に関するでっち上げ話しを流布させた。ヒースはお払い箱になった。[そしてサッチャーが引き継いだ。]それだけでは十分でなかった。労働党が 3 期目の政権を目指しているのではないか，NATO や核兵器に反対する左翼の連中に穏健派が取って代わられるのではないかという不安が，財界や軍関係者のなかには高まっていた。思い出してくれ，当時はインフレがものすごく，産業はストライキでだめになっていた。[で，結局どうなったのかね？]裏切りさ。労働党政権を転覆してくれと CIA から圧力がかかった。ウィルソン首相は KGB のスパイだと主張する情報を CIA は MI5 にたれこんだ。霞ヶ関（Whitehall）の連中の支持を取り付けた，CIA と MI5 の合同演習だったわけだ。あらゆる汚い手段が使われたね。中傷，侵入，夜盗，盗聴，恐喝，偽情報。」(71'35"-74'12")

ここには2つの異なる政治的陰謀が語られている。まず，ヒース（Edward Heath, 1916-）からサッチャー（Margaret Hilda Thatcher, 1925-）への保守党党首の交代劇（1975）は，イギリス諜報部単独による〈ヒース叩き〉が奏効したものであること，2つ目は，イギリス諜報部とCIAの共同謀議によるウィルソン(Harold Wilson, 1916-）労働党政権の転覆劇（1976）である。

だが，ネヴァン邸に設置された音声感知作動式録音機で収録されたとされるこのテープの内容は，必ずしも明瞭ではない。ひとつには，複数人の会話であるため話者が特定しにくいこと，また，これをジェスナーがダブリンからベルファーストに向かうレンタ・カーの車内で再生し，ほんのさわりの断片（僅かに1分48秒）しか耳にすることができないことが挙げられる。例えば,「彼の弱点は何か？何をこれまで流布させてきたか？どんな噂を信じ込ませられるか？――ヒースのことは我々は良く知っている。我々のヒース観もよく分かっている。我々はこの件に関しては（MI）5（ファイブ）に頼るべきだ。」(99'39"-59") あるいは,「現在行われているストライキ，地方自治体のストライキなどに囮を送り込む必要がある。選挙までその必要がある。やってみてくれ。――問題は，民主主義が頼りになるか？だ。そこかしこをちょっとつついてやれば。――それには賛成だ。ある意味で，それが肝心だ。だからこそこうして集まっているのじゃないかね。モスクワのウィルソンについて流布できるものがあれば。ウィルソンが狙い目（somebody we should home in on）だと思うね。ウィルソン関係のものを広めるべきだな。」(101'49"-102'28")仮に百歩譲って，これが陰謀の会話に間違いないとしても，果たしてこの謀議が実行に移されたかどうかは，別の次元の証拠が必要になることは当然で，この点の曖昧さが映画としては致命的な急所だろう。以下に，どのような陰謀工作があったのか，MI5の大物ロバート・ニール卿（Sir Robert Neil），サッチャーの政治的盟友アレック・ネヴァン（Alec Nevin）とケリガンの議論を採録して，説明に代えよう。なお，アレック・ネヴァンなる人物は，実在した保守党議員エアリイ・ニーヴ（Airey Middleton Sheffield Neave, 1916-79）と目される[8]。ニーヴは1970-75年国連難民高等弁務官のイギリス代表,1975年保守党の北アイルランド担当議会スポークスマンとなり，サッチャーとともに強硬なテロ対策姿勢を打ち出し，3月30日（労働党内閣不信任案可決の翌日）下院の地下駐車場付近において，アイルランド民族解放軍（INLA）が設置した爆弾によって車内で爆死を遂げている。(彼は北アイルランド紛争による国会議員最初の犠牲者であり,国会敷地内での犠牲者は約150年ぶりという。)ニーヴは第2次大戦で捕虜となったドイツの収容所から脱走，法職に就いて戦後ニューレンベルク裁判に出席，この間の事情をまとめた著書もあり，大物政治家である点を配慮して実名を避け,イニシャルA.N.の一致による暗示にとどめた

ようだ。

ネヴァン　1970年代の混乱を覚えておいでかな，ケリガン君。われわれが直面した混乱状態を？ストライキや暴動で炭坑夫たちは保守党政権を崩壊させるわ，インフレは天井知らずで，ヨーロッパの債権者たちが列をなして責め立てていたじゃないか。いやまったく，われわれの挫折をいかにヨーロッパが楽しんでおったことか。だから手をこまねいたりせず，我々の一部は団結し，対策を講じたのだ。

ケリガン　つまりは，陰謀があったのですね。

ニール卿　なあきみ，政治というのは陰謀なんだな。

ネヴァン　大事なことは，我々の道は収斂する…

ケリガン　どんな具合にですか？

ネヴァン　つまり我々はともに国家に仕えておるのだ。

ケリガン　違います。私は国家を守ります。あなたたちは転覆させている。

ニール卿　よかろう。お互い，腹を割って話そう。労働党政権転覆を意図して違法な手段が使われた。しかし，すべて過去の出来事なんだ。過ちをほじくり返して，法や秩序に対する敬意が回復できるとでも思っているのか？現実をごまかしちゃいけないな，ケリガン。例のテープの内容を表沙汰にしたいのなら，どうぞ好きにするがいい。だが，まず結果を考えてくれ。ありとあらゆる扇動家，知識人，市民権に関して熱弁をふるう大仰な自由主義者たちがこの機会をとらえるだろう。君は国家を守ると言った。私だってそうだ。しかし，議会とその制度こそが国家であり，政府，法の支配，議会の信頼性を脅かすものはなんでも，国家にとっての脅威なのだ。余計なお節介はよしたまえ，ケリガン。50年後に歴史家たちに発見させよう。われわれの任務は官邸を守ることなんだ。

ネヴァン　とにかくテープは公表されませんな。厳密に言えば君の仕事じゃないからね。それは君の管轄外だ。

ケリガン　その考えは受け入れられません。

ニール卿　アレックや他の連中が8年前にやったことはひどい間違いだった。

ケリガン　単にひどい間違いだっただけではありません。犯罪でした。

ニール卿　間違っていたが，理由は正しかった。彼らは当時もそして今も，立派な人間だ。

ケリガン　法律を侵しました。

ニール卿　その点は認めよう。プロの警官として教えてほしいのだが，警察に課せられた規制のせいで，常習犯が往々にして利益を得る，ということに君は気付いてはいないかな？

ケリガン　まったくその通りです。

ニール卿　そして，有罪を確かなものにするために，そうした規制を警察が取り除く，例えば，民主主義打倒を画策する政治テロリストを逮捕するために電話を違法に盗聴する，といった場合だが，これは果たして正当化されるかね？

ケリガン　状況によります。

ニール卿　それなら，もっと具体的にしよう。1974年にIRAはバーミンガムのパブを爆破した。21人の若者が死に，162人が負傷した。警察は，つまり君の同僚たちは，6人のアイルランド人を逮捕した。彼らは，婉曲的な言い回しでは〈徹底的な尋問〉を受けた[9]。

ネヴァン　人殺しの豚どもを死ぬほど蹴りまくった，ってことだ。

ニール卿　そして自白を引き出した。それが法廷で採用された。それは正当化されるかね？

ケリガン　そんな真似をしたというのなら，間違っています。

ネヴァン　その台詞，バーミンガムの人々に聞かせてやってくれ。
ニール卿　私の言わんとしていることはだね…
ケリガン　あなたの言わんとしていることは分かります，ロバート卿。体制を維持するためには，権力の濫用もときとして必要だと。
ニール卿　さよう。自由な社会に暮らす自由を享受させてくれるからね。国民が払うのに吝かでない代償だ。
ケリガン　それは危険な考えです。
ニール卿　だが現実的な考えだ。(83'29"-87'20")

(C)　スパイ暴露本について

上述のような陰謀を暴露しようとしたのは元スパイのハリスであった。このような陰謀工作が娯楽スパイ映画などの全くの虚構なのか，それとも事実であるのかの判断は局外者には困難である。先頃（10月22日）逝去したイギリスのスパイ作家の大御所エリック・アンブラー（Eric Ambler, 1909-1998）によれば，スパイは太古からの職業で，旧約聖書にもモーゼがスパイを送り込んだ記述があり，「ふさわしい場所に置かれた一人のスパイは，戦場の二万人の兵士に匹敵する」というナポレオンの言葉があるという[10]。おそらくは，一般人には容易に感知されないだけで，スパイそのものの存在は普遍的と考えねばならないのだろう。つい最近では2万ポンドで新聞に機密を売り，1998年8月逮捕，その後保釈された元MI5のシェイラー(David Shayler)，少し旧聞[11]では，KGBに情報を漏らしソ連に亡命したドナルド・マクリーン（1955年）やキム・フィルビー（1965年），二重スパイの大物ジョージ・ブレイク[12]，さらにはキャシー・マシター（Kathy Massiter）ら元情報機関員の告白証言（1985年），政府のスパイ衛星の情報を暴露したシルコン事件[13]，そして極め付けは，退職したMI5の高官ピーター・ライト（Peter Wright）がその著書『スパイキャッチャー』(*Spycatcher*, 1987) で暴露しているように，元MI5長官をも含むソビエト・シンパがMI5内部に潜入していたばかりか，1974年にはウィルソン首相の電話盗聴や労働党副総裁の銀行口座書類の捏造などによって，当時の労働党政権を10月選挙で打倒する計画をMI5が画策していたことが明らかになっている。もちろんこの種の暴露本はつねに眉に唾して慎重に読まねばならないが，それを踏まえたうえで，このウィルソン政権転覆の事情についての興味深い言及をいくつか以下に拾ってみよう。

「ウィルソンが首相になった。彼は当然，MI5の注意をひくことになった。ウィルソンは首相になる前には東西貿易関係団体の仕事をしており，何度もソ連を訪れていた。KGBが訪ソする人々をワナにかけたり，無実の罪をきせるためにどんなことでもやりかねないことをMI5は十分知っていた。それだけにウィルソンがソ連によって手なずけられている危険性が十分あると警戒したのである。

ウィルソンがゲイツケルの後を継いで労働党の党首となったとき，ウィルソンと MI5 との間には摩擦を起こす別の原因があった。ウィルソンの周りを，東ヨーロッパから亡命した実業家たちが取り巻き，その中の何人かは MI5 が監視，警戒していた人たちだったからである。／ウィルソンが64年，首相になった後，アングルトンが F.J に会いに英国に来た。（中略）アングルトンによると，この情報では，ウィルソンがソ連の工作員だという。」[14)]

「私を雇おうという男は，（中略）「われわれはこの国の将来を憂えるグループの代表である」と，抑揚をつけていった。（中略）「労働党政権の復活は，われわれが享受し，大切にしているすべての自由が失われることを意味する」と彼はいった。同席者もうなずいた。「私にはどんなお手伝いができるのですか」とたずねた。「情報ですよ。われわれは情報が欲しいんだ。あなたはその情報を持っているはずだ」と彼はいった。「いったい何を知りたいのですか」と私は聞いた。「ウィルソンに関するものなら何でも役に立つだろう。その手の情報には高い金を払う奴が大勢いるよ」」[15)]

「74年には，われわれはもっと真剣に取り組んでいた。計画は簡単だった。議会がかなり不安定なことから，選挙は数か月のうちに行われるに違いない。その前に MI5 が労働党の主な幹部，とくにウィルソンに関する情報のいくつかを自分たちに同調する新聞記者たちにもらすよう手配するというものだった。新聞界や労働組合役員らとのコネを使えば，MI5 のファイルにある情報の中身や，治安当局がウィルソンを危険人物と考えている事実を世間に広められるというわけであった。」[16)]

イギリス本国では出版が差止められたものの，『スパイキャッチャー』はオーストラリアやアメリカで出版された。イギリス政府が外国での出版まで懸命に阻止しようと働きかけたことで，かえってこの退屈な書物をベストセラーにしたという皮肉な指摘もある。国内出版禁止の『スパイキャッチャー』は，米・豪から輸入されて広く流通していたし，同じ著者が情報源となったピンチャー（Chapman Pincher）という作家の別の暴露本（*Inside Story*, 1978; *Their*, 1984）にはお咎めがないなど，政府の介入の有効性や一貫性のなさも問題ではあったが，今日，多くの歴史書が『スパイキャッチャー』には否定的である。いわく，「自己の年金権利にまつわる怨恨を出版によって補償する」[17)]という「貪欲と悪意から執筆された」[18)]からだという。しかし，『スパイキャッチャー』の一部抜粋記事をイギリスの新聞（*Sunday Times, Guardian, Observer*）が掲載しようとするのまで禁じた政府の干渉は，1990年欧州人権問題委員会から第10条違反の裁決を受けることになった。この当時のイギリス政府によるメディア検閲，とくにテレビ番組検閲の強硬姿勢は常軌を逸するほどで，北アイルランド問題を扱った番組 *At the Edge of the Union* や *Real Lives*，IRA 容疑者の殺害事件を扱った *Death on the Rock*，Secret Service を扱った *My Country Right or Wrong* を巡って，激しい論争が巻き起こった[19)]。とりわけ，テムズ・テレビ放送の *Death on the Rock* は，1988年 3 月 6 日ジブラルタルで起きた，SAS による 3 人の IRA メンバー（Mair-

ead Farrell, Danny McCann, Sean Savage）の射殺事件の真相を，一切の警告なしに私服のSASが発砲したという目撃者の生々しいインタビュー証言とともに検証する内容だった。これはわが国のNHKでも放映されたし，この事件にヒントを得たと思われる劇画（『MASTERキートン』）もある。

電話盗聴や親書の開封は，内務大臣または他の大臣の発行する委任状さえあれば，諜報部，警察，税官吏は合法的にこれを行うことができ，1979年には（アルスターを除く）英国で467件の委任状が発行された。北アイルランド紛争前の1958年における150件と比較すると実に3倍以上であり，それでもこの数字は非合法的に行われている活動全体から見れば氷山の一角とされる。もちろん政府のこうした反動的な動きに，イギリスの政治家たちが黙認ばかりしていたわけではなかった。下院議員たちはこの面での法規制を要求し，これに応えて1980年，内務大臣が諜報活動を監視する判事を任命し，1981年3月にまとめられた『ディプロック報告書』（Lord Diplock's Report）では，諜報制度に問題はない旨を発表した。これに対して，報告書は不十分であると下院議員は反発，1985年になって「通信傍受法」（Interception of Communications Act）が制定され，内務大臣が電話や郵便物を調査できる権限を次の3つの場合――1）重大犯罪の防止や探知，2）国家の安全保障，3）国家の経済的安寧の保護――に限定し，これ以外の傍受は刑事犯罪であると，政府の動きを牽制するに至った。ロイド法務大臣（Lord Justice Lloyd）が1986年にまとめた報告書では，同年12月時点で317件の委任状が実施中である旨を発表，この「通信傍受法」による抑止効果が強調されたが，それでも依然として高い水準にあることは否めない[20]。1986年12月議会では，Security Servicesの活動を監視する特別委員会の設置を下院議員らが要求したものの，MI5メンバーMicheal Bettaney事件（1984年）以後，組織の見直しが進み，管理運営や人事の点検は改善されているとして，内務大臣ダクラス・ハード（Douglas Hurd）はこの要求を拒絶している。このように，『隠された議題』が制作された1980年代の時代背景には，イギリス政府のテロ取締・安全保障強化の動きとそれを牽制する勢力との緊張関係が存在していた。

4．映画作品としての『隠された議題』の批判的評価

モデル問題や時代背景を離れて，ここからは『隠された議題』の映画作品としての評価を論じよう。ベネチア，ベルリンと並ぶ世界3大映画祭のひとつ，カンヌ映画祭で審査員賞（Special Jury Prize）を受賞[21]した本作品は，地元フランスのマスコミを中心に公開当時には相当数の映画評が新聞や雑誌に掲載された。筆者が入手したもの

はその一部に限られるが，論調の多くは，映画制作の趣旨には概ね賛同しつつも，(A)作品の暗さやテンポの緩慢さ，(B)人物造型の脆弱さ，そして(C)陰謀暴露の効果のなさ，(D)政治的偏向の問題，などを欠点として挙げている。その代表的な批評を以下に掲げ，続いて項目ごとに検証してみたい。

「善意で制作されたとはいえ，すこぶる陰気な作品である『隠された議題』は，義憤によって自らの首を締めている。ロウチが用いたドキュメンタリーの方法がこの作品では機能していないのは，よりすっきりした構想と，登場人物へのより深い焦点がここでは必要とされるからである。次々と驚くべき発見の連続で観客の気をさらうことなく，緩慢にこの映画は進んで行くのだが，観客の興味をそそりはしても，心をつかんで離さぬ，ということが決してない。映画に描かれた卑劣な陰謀工作は確かに憤激を生みはするが，イギリスの北アイルランド政策の醜悪な渦をほんとうには見抜いておらず，その陰謀を外から何気なくかいまみさせているにすぎない。」[22)]

(A) 作品の暗さや展開の緩慢さ

弁護士ポールは映画開始後まもなく（18'22"）射殺される。主人公と思われた人物が映画の6分の1あたりで早くも姿を消すのは意外だが，逆に言えばそれだけ意表を突く緊迫した今後の展開を予期させる。ところが，このあと被疑者の取調べが順次行われていき，法廷ドラマを感じさせる激しい言葉のぶつかりあいが繰り広げられはするものの，「勿体ぶった歴史のお説教を絶えず人物に喋らせる饒舌な台本」（*The Independent*, 17 May 1990）の側面もある。さらに，事件の真犯人は誰か，その〈真実〉は最初から提示されている。こうした形で次第に犯人に迫るのは『刑事コロンボ』的手法であるが，『刑事コロンボ』とは違い，『隠された議題』には新しい発見や見事なトリック解明がある訳でなく，既知の事実を幾度もなぞる形で進行し，たしかにスリリングさに乏しい。テープが渡ったとされる謎の「天辺禿げ」（thinning on top）の凶悪人物マッキー（McKee）も，映画全体の展開から言えば端役にすぎない。したがって，アクションが連続するハリウッド映画に慣れた貪欲な目には，射殺以降の展開は総じて堪え難いことだろう。また，映画の性質上やむを得ないことだが，ユーモアや明るさが欠落しているのは事実である。この映画には登場人物が笑う場面がほとんどない。記者会見を終えたアンリが，誰だか女性とデートにでも行くらしく，ポールとジェスナーに手を振る場面（13'25"），尋問に圧倒されたフレイザー警視が「一服しても構いませんか」と尋ねたところ，「駄目だね」とケリガンから剣もほろろに冷たく言い渡され，速記中の女性秘書が思わず口元をほころばせる場面(57'25")，それぐらいしか思い浮かばない。だが，これは深刻なテーマを扱う以上は当然のことで，『隠された議題』に明るさを求めるのは八百屋で魚を求めるのに等しいだろう。

(B) 人物造型の脆弱さ

登場人物に焦点が絞り切れていないという指摘を，ケリガン，ジェスナー，ハリスとモロイの順に検討してみよう。

（ｉ）ケリガン

恰幅のいい俳優ブライアン・コックス（Brian Cox）演じるケリガンは，精力的で誠実な調査官刑事として適役である。26年間の刑事歴を誇り，「買収されるわけがない刑事」(the cop that couldn't be bought)［90'47"］として乗り込んできた彼は，「もしこの銃撃にいかなる形にせよハリスが関与しているとすれば，誰の癪に触ろうと知ったことじゃない。(I don't care whose toes I tread on.) 彼は調査対象になる。それ以上でもそれ以下でもない」(46'50"-47'00") と大見えを切り，北アイルランド警察署長さえ「でけえ態度はよしやがれ！」(Get off your fucking high horse!) (60'06") と大音量で恫喝し，「あんたはアイルランド病にとりつかれたな。偏執狂になりかけているぞ」(63'44"-46") と逆襲されるや「この件に関して私は辞職してでも，恥を外にさらす覚悟がある」(63'48"-52") と言い切ったにもかかわらず，最後にはその彼も権力に屈服してしまう。

ケリガンのこの断念の経緯にいまひとつ説得力がない。車中で渡された盗撮写真には，警官２人を殺害して７年の刑に服したリーアム・フィルビンと同席し，IRA の募金活動に小銭を寄付している姿や，ジェスナーに顔を近付けてキスしようとする（かに見える）姿が写っている (88'44"-89'06")。前者の写真は，パブでは御馴染みのサッカー籤の掛金を払っているだけで，それが IRA の資金に流用されることは事後になって教えられた。微々たる金額で，捜査活動の一環として Falls 地区のパブを訪ねているのだから，釈明に窮する行為ではない。後者の写真は，ライブ演奏で賑やかな店内では当然ながら耳元に接近して話しかけねば相手には聞こえず，アングルによって解釈が歪められ，広い文脈を欠いたまま，ある一瞬をたまたま切り取る写真のもつ恐ろしさを示すものといえる。これらの写真が，大衆向けタブロイド紙に送られて，スキャンダラスな報道をされた場合，前者が警官の公務に抵触する政治的活動，後者が事件被害者の関係者との不倫疑惑という道徳的問題として彼をさらし者にする可能性はある。妻帯者で息子たちもいるケリガンにとって，不倫報道は家庭崩壊を招く恐れがある。映画では，彼の私的な面には余り言及されないのだが，「最近，思ってるほどには会えない」([I do] not [see] as often I'd like.) [44'47"-57"] と漏らす３人の息子たち（２人が大学生，１人は生徒）や，妻との関係について，もう少しさりげなく描かれていれば，ケリガンの人間味が増し，〈転向〉の事情も理解しやすくなるのではと思われる。いずれにしても，この写真による威嚇は決定的なものとはいいがたく，むし

ろ，同僚マックスウェルの捜査協力拒否の決意が彼を翻意させたようだ。その名前からしてそうだが，ケリガンが「カトリック」である事実，すなわちアイリッシュであることは重要である。彼が北アイルランド警察から冷遇されるのは，内部犯罪を暴く任務の特殊性もさることながら，アイルランド系刑事だからIRA寄りの立場だろうという勝手な憶測が，ケリガンへの反感の根底にあるといえる。いずれにしても，（自らの警官生命を賭してでも初志貫徹するだろうという，筆者の甘い予想を裏切って）ケリガンは徹底捜査を断念する。唯一，慰めなのは捜査本部を引き上げる際に，陰謀工作に関与した6人（アレック・ネヴァン，ジェラルド・ビニング，ランドル卿ほか）の書類一式（dossier）を廃棄処分せず，「保険だ」（Insurance.）［100'25"］と言ってケリガンが持ち帰っていることで，真相究明に不可欠な記録が後世に残されたことをこれは示唆する。

（ii）ジェスナー

この映画で一貫して正義を貫く良心的存在は，人権擁護活動家イングリッド・ジェスナーである。だが，ジェスナー役のフランシス・マクドーマンド（Frances McDormand）の演技力には，「さまざまな情感を無理に出そうとしている。激怒するときには苦心の跡が見え，自然な感情があまりない」[23]と批判がある。

彼女が公民権運動に関わるようになった原点は，「ベルファーストはチリを思い出させるわ」（11'32"）という台詞が示すように，南米のチリだった。1975年，ピノチェト大統領[24]（Augusto Pinochet Ugarte, 1915-；在位1974-90）による軍事政権（Junta）下のチリで「失踪者」（*The Disappeared*[25]）と題するテレビ・ドキュメンタリー番組の取材中，共同作業をしていた若いチリ人ジャーナリストが行方不明になり，たまたまチリで人権擁護活動をしていたポールと出会ったのが契機だという。おそらくチリの秘密警察DINA[26]（Dirección de Inteligencia Nacional）の手で，そのジャーナリストが処刑されていたのが判ったのは1年後，番組「失踪者」も検閲にかかり放映されなかった（43'39"-44'44"）。出会った恋人を二人とも国家権力の手で惨殺される不運にジェスナーは見舞われたことになる。彼女がコミュニストのこのチリ人青年との間に身篭もった子どもを中絶していた事実はケリガンには明かされておらず，諜報部高官ニール卿から思いがけず聞かされた彼は軽い衝撃の表情を見せる（88'28"）。もちろん初対面の刑事に堕胎の過去まで打ち明けることはありえないだろうが，「信じている」という彼女の言葉とは裏腹に，ケリガンに全幅の信頼を寄せるには至っていなかったのだ。北アイルランドと南米チリの結び付きは意外に思われるかも知れないが，政権担当時期がほぼ一致することもあって，英首相サッチャーはチリ大統領ピノチェトに類型的になぞられて論じられることが珍しくなかった。たとえば，「左翼の多くの作家に

とって，サッチャリズムは著しく非民主的なものであり，チリの軍事独裁者ピノチェト将軍をモデルとする強力な国家を，機会があれば，歓迎しようとするいう主義であった」[27]という一節がある。チリの軍事独裁のおぞましさを実感するには，マゼラン海峡の彼方の厳寒のドーソン島に拘禁され強制労働と拷問を受けた人々の実態について語った体験者の報告記[28]にあたるのがよい。

キャストに関する面白い指摘は，ジェスナーとケリガン警部の間には（空港での最後の訣別の場面を除けば）緊張関係はおろか，ロマンスめいた心の交流もないのだから，いっそのこと，ポール（ブラド・ダーリフ Brad Dourif）と役柄を交替したほうがよかった，という指摘である[29]。つまり，映画の冒頭で射殺されるのをジェスナーに，彼女の死の事実究明に乗り出すのをポールにすればよい，というのだ。たしかに，巨悪に挑むヒロインとしての逞しさがジェスナーには欠けており，たとえむさ苦しい男ばかりが活躍する映画になるにしても，ポールを前面に押し出す方が力強さが出たであろう。別の皮肉な見方をすれば，この〈ジェスナー＆ポール〉役の〈マクドーマンド＆ダーリフ〉のキャスティング（casting 担当は Susie Figgis）に問題がないわけではない。なぜならこのペアは，『隠された議題』のわずか2年前に公開された別のアメリカ映画，アラン・パーカー（Alan Parker）監督作品『ミシシッピ・バーニング』（*Mississippi Burning*, 1988）では，隠れ KKK 保安官代理クリントン・ペルとその美容師の妻の役柄で登場し，保安官事務所（警察）の組織ぐるみ犯罪の醜悪な実行犯をダーリフが演じているのだ。そのうえ終盤には，夫の偽アリバイ証言を撤回した妻をダーリフが素手で殴って虐待する場面，いわゆる DV（domestic violence）の場面があり，『隠された議題』で虐待反対の人権擁護家としてこの二人が仲良く揃って登場するのは，『ミシシッピ・バーニング』を先に見た者にはおそらく強い違和感があるだろう。もちろん，職業上，俳優がさまざまな役柄[30]を演じなければならないことは承知しているが，『ミシシッピ・バーニング』との主題の顕著な類似性を思うとき，あるいは無名の俳優を多用することでドキュメンタリーの現実感を見事に表現してきたケン・ロウチのこれまでの手法を考えるとき，観客の脳裏に刻まれた別の映画の矛盾する役柄の印象は，決してよい方向には働かないものだ。

『ミシシッピ・バーニング』は，1964年6月21日夜，黒人差別の横行していたアメリカ南部ミシシッピ州ジェサップ郡で，公民権活動家の白人青年2人と黒人1人が乗った車が，あろうことか保安官に襲撃され惨殺された事件を扱う。FBI 捜査官ウォード，アンダーソンの事件真相究明の努力は，かえって KKK が支配するこの町の体制との摩擦を生み，黒人への暴力的差別を激化させる。こうした白人による黒人差別，果ては焼き討ち（標題『炎上するミシシッピ』が意味するのは，KKK の卑劣な放火で燃え

上がる黒人家屋である）は，公民権闘争時代のベルファーストで頻発したカトリック居住区への放火を連想させずにはいられないし，公民権活動家が警察権力の手で，しかも車中で射殺される冒頭シーンは2つの作品に共通している。したがって，ポールのキャスティングとしては，少なくともブラド・ダーリフは回避すべきだったのではないか。また，線の細いマクドーマンドは，『ミシシッピ・バーニング』の従順な妻役には適役でも，『隠された議題』では荷が重い感がある。（ちょうど，『マイケル・コリンズ』でコリンズの婚約者役のジュリア・ロバーツが酷評を受けたように。）いずれにせよ，『ミシシッピ・バーニング』のなかの彼女の台詞――「憎しみは生まれつきじゃない，教わるのよ」――は，北アイルランド，アメリカ南部を問わず，差別や紛争の本質を衝く重い言葉であろう。

話が少し込み入ってくるが，『ミシシッピ・バーニング』撮影中のアラン・パーカー監督になされたインタヴュー[31]で，最も影響を受けた監督と作品名を訊かれたパーカー監督の回答は，奇しくもケン・ロウチの『キャシー・カム・ホーム』（*Cathy Come Home*, 1966）だった。そして，「もし，1988年［現在］のハリウッドにケン・ロウチがいたら，どんなことをするだろうかねえ」と言い添えている。すなわち，『ミシシッピ・バーニング』が『隠された議題』と類似の印象を与えるのは，まさにアラン・パーカーがケン・ロウチを敬愛していたがゆえに，無意識的に作風が似てしまった側面があるのだ。パーカーの次回監督作品が，ダブリンを舞台にした『ザ・コミットメンツ』（*The Commitments*, 1991）だった背景もそこにあるのだろう。序でながら，『隠された議題』のなかには1シーンだけ，「燃え上がる」場面がある。恐喝に使われた大きな白黒写真を早朝，ホテルの部屋の屑篭でケリガン刑事が「焼却」する場面（93'35"-52"）で，権力の威嚇に屈服し，不利な証拠湮滅を図る，敗北の炎である。

（iii）ハリスとモロイ

変節したスパイであるハリスについてはマックスウェルが調査した資料に経歴が詳しい。James John Harris が本名で，1942年イングランド北部 Tyne and Wear 州の都市ゲイツヘッド（Gateshead）生まれ。宗派はプロテスタント。1960年に兵卒として入隊，64年に中尉昇進，71年アメリカのノース・キャロライナ州にある軍事教練センター（Fort Bragg）の Special Warfare School に入学，72年〈サイオップス〉（PsyOps）の名で知られる心理作戦部隊配属，73年上級大尉として北アイルランド勤務，それ以降は機密事項となっている（45'21"-46'08"）。ポールを案内して殺されたフランク・モロイも，実はハリスの部下でメイズ刑務所のあるリズバーン勤務だったことから，『隠された議題』には二人の裏切り者の諜報部員が登場したことになる。ポールを案内する車のなかでモロイは早速「1169年。800年間。われわれは独立のための闘いを続けてき

たのです。武力，飢饉，焼討ち，絞首刑，射殺，連行。なんでも体験してきました。」(17'17"-34") と問わず語りに切り出すのだが，いくら寝返ったからとはいえ，これは到底，元諜報部員の台詞とは思えない。12世紀のヘンリー2世の侵攻にまで言及する点は，まるっきり生粋のナショナリストの常套句でないだろうか。既に見たケリガンの場合同様に，ハリスの変節の意図がよく分からない。パブの奥の部屋で行った彼の告白にあるように，イギリス諜報部が時に政権転覆を画策するような政治的越権行動に出たことへの反発は十分に理解できる。異議を唱えた彼は，精神的疲労を口実に，諜報学校教官としてイギリス本土勤務に戻され，再び北アイルランドに戻ってきたのは1977年後半だという。つまり，1974年のヒース失脚，1976年の労働党政権崩壊に関わるとされる陰謀工作の密談の録音はこのイギリス配属直前になされたらしい。だが，自らも認めているように，愚かにも口論の際に盗聴テープの存在を口走ったため，当局の監視下に置かれ，郵便開封や電話盗聴，家宅捜査を受け，ついには逃走していまやIRAの庇護下に置かれる身に転じた。彼が謀議テープを表沙汰にすることで成し遂げたかったのは果たして何だったのだろうか。国家犯罪の告発，すなわち，真理や正義の主張だろうか。金銭や名声を求めている節はなく，彼の引き換え条件は，身の安全のための保護拘留 (protective custody) 及びテープ公開だった。減刑処分や免責特権と交換に仲間に不利な法廷証言を行う者を北アイルランドでは〈スーパーグラス〉(supergrass) と呼ぶ[32]が，ハリスもまた〈スーパーグラス〉に属するのだろうか。いずれにせよ，裏切り者のスパイ[33]というこの烙印は彼をさほど同情に値する人物には見せない。ハリスにおいても，その家族の影（妻や子どもはいなくても，両親や恋人はいるはず）が薄く，彼が価値あるものと信じていたのは一体何だったのか，スクリーンにはなにも浮かび上がってこない。

(C) 陰謀暴露の効果のなさ

陰謀の暴露が効果的でないという指摘は，監督の政治的メッセージの有効性に疑問を呈する本質的な批判であり，しかもイギリス政界の陰謀の暴露こそは，おそらくケン・ロウチが最も力を注いだに違いない部分であるがゆえに，傾聴に値する。では，なぜ効果がないのか。

「問題点のひとつは，蔓延した組織的腐敗の示唆を別にすれば，脚本では，テープの中身と北アイルランド紛争の関連が明確では決してないことである。(マーガレット・サッチャーがもちろんこの映画の真の標的であるが，当地で映画公開される前にサッチャーが辞任してしまったことは映画制作者にとって不本意だっただろう。)実際，話の進行とともに，北アイルランドは次第に無関係になっ

ていくのだ。」[34)]

この指摘は正確かつ重要である。北アイルランドの政治的悲劇を描くこの作品が，後半に入るとたしかにイギリスの諜報部や実業家，大物政治家のどす黒い裏工作の糾弾に重点が移行し，北アイルランド紛争自体の影がやや薄くなってしまっている印象が否定できない。このことはイギリス人監督の視点や関心の枠組みの無意識的限界なのかも知れない。後のインタヴューで見るように，ケン・ロウチ自身，北アイルランドにおける〈撃ち殺し〉とイギリス政界の〈陰謀〉とを無理に結び付けようとした試みに反省の弁を漏らしている。別の論者の言葉[35)]を借りれば，この陰謀暴露は「面白いメロドラマかも知れないし，何年か先には立証可能な歴史かも知れない。しかし映画のほかの部分との兼ね合いは，まるでアブのうえで釣り合いをとろうとしている象のようだ（like an elephant balancing on a gadfly）」ということになる。つまり，〈撃ち殺し〉を主軸に進行してきた映画にとって，突如明らかにされる〈陰謀〉はバランスを欠くほどに荷が重いのだ。

サッチャー辞任との関連について言えば，『隠された議題』のアメリカでの一般公開は1991年１月11日らしいが，すでにこの作品は1990年５月中旬にカンヌで上映され評判になった訳で，11月28日のサッチャー辞任に半年先立っている。「鉄の宰相」の辞任は，すでに見たような『ストーカー報告書』や北アイルランド問題の対応ではなく，ヨーロッパ統合問題めぐってのジェフリー卿（Sir Geoffrey）の辞任が引き金となったのだけれども，『隠された議題』公開がなんらかのインパクトをサッチャー政権に与えたであろうことは想像に難くない。もっとも，陰謀の最も奥座敷にいたとされる当のサッチャーは，自伝的回顧録では〈撃ち殺し〉方針や「ストーカー報告書」，さらには先に見た『スパイキャッチャー』についてはほとんど黙殺の姿勢を貫いている。「ストーカー・サンプソン・リポート」は，僅かに１度だけ言及され，それはアイルランド首相ホーヒーが行った「驚くべき演説」のなかで述べられた，IRA にばかり都合のよい身勝手な主張の一例として触れられているにすぎない[36)]。IRA による1984年のブライトンでの保守党大会爆破事件で難を逃れたサッチャーにとって，北アイルランド問題は徹頭徹尾，IRA の極悪非道にすぎないと思い込んでいる印象を筆者は受ける。

(D) 政治的偏向の問題

のちに見るように，この映画は IRA 擁護の姿勢を政府や一部のマスコミから激しく非難された。映画全体の基調はなるほど反イギリスであり，イギリスの北アイルランド統治を厳しく糾弾する空気がみなぎっている。しかし，果たして一方的に共和派寄

りの情宣作品に仕上がっているかというと，決してそうではない。例えば，観客の視覚的注意を喚起する効果を持つ引用字幕の政治性を検討してみれば分かりやすい。「アイルランドの所有権はアイルランド人民にある」という字幕で映画が始まっているから脚本家と監督の政治姿勢は明らかだ，とする主張[37]は一面的で誤りである。なぜなら，正確を期せば，この映画では冒頭（①②）と末尾（③）に3つ，字幕を用いて台詞が引用されているからである。

① "The entire ownership of Ireland, moral and material, up to the sun and down to the centre is vested of right in the people of Ireland." ——James Fintan Lalor, 1807-49（0'30"-43"）（「アイルランドの全所有権，事実上かつ本質的な所有権は，上空から地底まで，アイルランド人民の既得権である。」ジェイムズ・フィンタン・ラロー）
② "Northern Ireland is part of the United Kingdom——as much as my constituency is." ——Margaret Thatcher（1'36"-43"）
（「北アイルランドは連合王国（英国）の一部です——私の選挙区がそうであるのと同様に。」マーガレット・サッチャー）
③ "It's like layers of an onion, and the more you peel them away, the more you feel like crying. There are two laws running this country: one for the security services and one for the rest of us." ——James Miller, ex-MI5 agent（105'50"-106'08"）（「まるでタマネギの皮みたいなもんで，剝けば剝くほど泣きたい気分になる。この国を治めている法律は2種類ある。1つは秘密警察用，もう1つはその他のわれわれ用だ。」ジェイムズ・ミラー）

①のラローは Young Irelander の一人で，伝記の記述[38]では，「近視で耳が聞こえず醜男」，そして終生病弱だったが，土地改革運動に情熱を注ぎ，*Nation* 紙に「アイルランド人民のためのアイルランドの土地」と題する投書を送っていることから分かるように，土地問題に執着した人物であり，いかにも彼らしい引用文と言えよう。②は1981年11月10日，ユニオニストの下院議員ハロルド・マカスカー（Harold McCusker）の質問に対する首相答弁[39]であり，往々にして簡略形の誤った引用'Northern Ireland is as British as Finchley.'が流布しているという。いずれにしても，①はナショナリストの立場，②はユニオニストの立場を明快に表明するもので，相対立する2つの立場を公平に冒頭で提示しており，文章の長短が字幕時間の長さにほぼ比例していることも付け加えておく。また，最後の③にある，イギリスの元 MI5 スパイの引用出典は不詳だが，これは映画『隠された議題』の全体を貫くメッセージであり，しかもイギリス固有の安全保障体制批判の一般論の文章として成立し，北アイルランド問題と切り離して考えることができる。したがって，上記3つの引用は政治的に極端にどちらかに偏向することなく，均衡がとれていると言えるのではないだろうか。

次に，『隠された議題』のなかで最も偏向していると思わる人物，つまりIRAの代弁者の声を，共和派パブのクラブ秘書リーアム・フィルビン（Liam Philbin）のアジ演説的な台詞で聞いてみよう。

「壁にかかっているのがジェイムズ・コノリーというアイルランドの指導者の写真です。コノリーはかつてこう言いました，アメリカや日本の問題を処理する確かな権利がイングランドにないのと同様，アイルランドの問題を処理する確かな権利もないし，われわれを射殺する権利がないように管理下におく権利もないのだ，と。それが答えなのですよ，イギリスの撤退が。」「あらゆる植民地を見てごらんなさい。例えば，アメリカです。ジョージ・ワシントンは当時テロリストと呼ばれました。ジョモ・ケニヤッタはテロリストでした。マカリオス大司教はテロリストでした。残念なことに，自由を手に入れるために植民地は闘わなくてはならないようです。自由は喜んで与えられるものでは決してありません。」(68'49"-69'33")

ジェイムズ・コノリー（James Connolly, 1868-1916）はアイルランド労働運動の指導者で，1912年ラーキン（James Larkin, 1876-1947）とともにアイルランド労働党を設立，1913年には交通ストを指導，1916年の復活祭蜂起に加わり，逮捕・処刑された人物である。このコノリーになぞらえているジョージ・ワシントン(George Washington, 1732-99）はもちろんアメリカ初代大統領（1789-97），ジョモ・ケニヤッタ（Jomo Kenyatta, 1894?-1978）はケニヤの初代首相（1963）で大統領（1964-78），マカリオスIII世（Makarios III, 1913-77）はキプロスの大主教でありキプロス共和国初代大統領（1960-74, 74-77），つまり，植民地の独立闘争は成功して定着するまでは，野蛮な謀反と評価され，その指導者はテロリスト呼ばわりされるのが常であったというのが，フィルビンの主張である。これが共和派の自己正当化論理であることは自明だが，それでも彼の主張は紛争の本質に関わるものであり，少なくとも，いたずらにテロリストを美化し，イギリスへの報復を焚き付ける性格のものでない。いっそう過激で扇動的な台詞はいくらも用意できただろうが，ロウチ監督はこうした大切な原則論にこそ力点を置いている。テロであるか革命であるかは，後世の判断に委ねられてきたではないか，というフィルビンの意見を正面から切り崩すのは容易ではないだろう。

さて，その一方で，ロウチ監督が糾弾しているはずの北アイルランド警察の〈撃ち殺し〉とその隠蔽工作に関しても，問答無用に悪者扱いして切り捨てるのでなく，ブロウディ署長の口を通して自己弁護の台詞――「北アイルランドの状況を肝に銘じてほしい。われわれはとてつもない圧迫の下で活動している。過去12年間，北アイルランド警察は治安維持のためテロリストたちと闘ってきた。140名が殉死した。3,500人が負傷し，155個の武勲勲章が授与された」(29'04"-24")――を語らせ，治安維持に当た

る警察の苦悩にもある程度の理解と配慮を示し，均衡のとれた論議を提示するゆとりがロウチにはある。同様のことは，ケリガンにIRA批判の言葉を言わせていることにも当てはまる。北アイルランド警察の刑事が今回の事件の実行犯である特殊部隊について，SSUもMI5やMI6も「みな同じ穴のむじな」(They all piss in the same pot.)で，「IRA対策に連中を使ってはいけないとは言わないが，連中は手に負えないんだ。やつらは銃を撃ちたくてうずうずしている。好きなところへ出かけては，やりたい放題だ。やつらが先に発砲し，尋問もしなかった」と攻撃するのに対して，「もっとも，相手方（＝IRA）もルールは守らんがね」(34'26"-27") と応じる短い台詞である。つまり，ケリガンは決して一方的に北アイルランド警察やその〈撃ち殺し〉を告発しているのでないし，ましてIRAにくみしている訳でもない。内部犯罪を調査するという，ケリガンの任務の特殊な性質が彼を反・警察権力に見せているが，もちろん彼自身，警察権力の体現者であることを忘れてはならない。IRAを賛美しようなどという意思はケリガンに微塵もないのだ。官舎やお抱え運転手の提供をケリガンが拒み，北アイルランド警察署長と鋭く対峙したのも，尋問対象とする可能性のある警官と馴れ合いになるのを防ぎ，職務に謹厳実直なまでに忠実であろうとしたからにすぎない。

最後に，宗教紛争の性格をもつ北アイルランド問題に関与する場合，やはりその当事者の信仰する宗教(宗派)が問題になる。イギリス生れのケン・ロウチ監督はChurch of Englandで育てられたが，現在は〈不可知論者〉(agnostic) を公言しており[40]，少なくとも新旧どちらにも偏らない視点は保証されている。『隠された議題』はたしかにカトリック側への共感が色濃くにじみでている作品だが，監督本人がカトリック教徒だから我田引水の主張をしている，といった低次元の批判や言い掛かりを浴びる恐れはない。

5．監督インタヴューにみる制作意図や反響

『隠された議題』制作の意図やメディアの反響などについては，ケン・ロウチ監督がいくつかの記者会見で誠実かつ詳細に答えているので，資料的な意義も兼ねて以下に収録し，若干の解説を施すことにする。(順序としては，最近のものを優先することにした。)

(A) 1994年11月のインタヴュー[41]（拙訳）

Q：次の作品は『隠された議題』でした。どのようにして関わられたのですか。

A：コロンビア・スタジオに入ったデイヴィッド・パットナムから，ジョン・ストーカーに関する

映画製作に関心はないか，と尋ねる電話をある日，貰いました。私は，「ある」と答え，ジム・アレンと組みたいと伝えました。パットナムは脚本を依頼しましたが，彼がコロンビアから戻ったとき，脚本は駄目でした。けれども，彼が関心を示したという事実は，投資する価値があると考える自信を他のみんなにも与えましたし，2年経ってようやくわれわれは資金を調達しました。しかしながら，イギリスの人々からは拒絶され，公開されるや即座に，保守党議員からは〈IRA 映画〉と呼ばれました。

David Puttnam は短期間だが Columbia Studios 社を取り仕切った人物。現実のジョン・ストーカーそのものを描くよりも，フィクションとした方が秘密警察やその手口（*modus operandi*）を表現しやすいとロウチは判断したようだ。しかしパットナムが社長の座を降りてからは，Columbia Studios 社は慎重姿勢を取り，最終的に『隠された議題』に経済援助してくれた映画会社はヘムデイル（Hemdale）で，この会社はかつてオリヴァー・ストーン（Oliver Stone, 1946-）監督の『プラトゥーン』（*Platoon*, 1986）にも出資している。ヴェトナム戦争（1954-73）を扱うハリウッド映画が戦後までなかった事実を思えば，『プラトゥーン』は勿論のこと，現在進行中の北アイルランド紛争を正面から扱ったこの映画の制作や出資は大変な勇気のいる仕事のはずだ。引用末尾にあるように，大衆紙に迎合して，〈IRA 映画〉という期待通りのコメント（knee- jerk response）を吐いた保守党議員スタンブルック（Ivor Stanbrook）を非難する一方で，激論（flak）が沸き上がる方がかえって問題提起になり，北アイルランド問題の実情を多くの人々に認識させる効果があるだろうと，ロウチは努めて冷静だった。

Q：いま仰られたように，この映画でジム・アレンと再びご一緒された。特定の脚本家ととても懇意に仕事をされるようですが，脚本家とはどういう関係を持たれるのか，またご自身，脚本に関わられていますか？
A：脚本家は映画のなかで最も過小評価されていると思いますし，私の場合，どんな企画を実施するのでも，脚本家と共同作業することがいつも基本的なことでした。通例，会話を通して二人の間に着想が生まれ，映画の形式やパターンについて大雑把に相談します。そしてジムならジムがいくつかの場面を書いてよこします。ジムはマンチェスターに住んでいて，なるべくならロンドンには出てきません。彼は郵便で，最近では近くの食料品店のファックスを使って場面を書き送ってきます。その後電話で相談したり，私の方から会いに行って，一緒に仕事をします。しかし執筆するのはジムです。

ジム・アレンとの共同作業で忘れてならないのは，ジム・アレン原作，ケン・ロウチ演出でロイヤル・コート劇場で上演が予定されていた『破滅』（*Perdition*）という舞台公演が，初演を目前にして中止に追い込まれたことである。ユダヤ人のパレスチナ

復帰を目指す運動〈シオニズム〉に異議を唱えるこの芝居に対して，イギリス中のマスコミが反対キャンペインの論陣を張り，「よりにもよって，作家たちの劇場たらんとするロイヤル・コート劇場」がその動きに同調したことに仰天し，「生涯で最悪」のエピソード，とロウチは語っている。

Q：『隠された議題』はどの程度が実際に北アイルランドで撮影されたのですか？
A：すべてアイルランドで撮りたかったのですが，映画の保険会社が，ベルファーストで撮影するなら保険には入れられない，と言うのです。「わかった，ベルファーストで撮れないにしても，リハーサルなら構わないよね？」とわれわれは答えました。1週間リハーサルを行い，実際にはその「リハーサル」を映画にしてしまったのです。結局，最初1週間，最後1週間撮影したので，ベルファーストで映画の半分近くを撮りました。
Q：1964年に監督をされた *Z Cars*［警察ドラマ・シリーズ］以来のジャンルものかと思いますが，その種のジャンルの定式で仕事をするのはいかがでしたか？
A：映画の3分の2までの部分は，実際われわれが作るべきだった映画になっていないことに気付きました。われわれは，〈撃ち殺し〉と〈陰謀〉の話を組み合わせようとしたのですが，かならずしも名案ではなかったかもしれません。企画の最後で感じたことは，もし委託から出発していなかったなら，通りの場面がもっと多い，違った映画にしようとしていたことでしょう。実際の制作は上出来でした。しかしながら，警察による調査ものの要点は，情報がきちんと正確な順序で明らかにされねばならないので，脚本にはかなり縛られました。後悔は少しもしていませんが，いまから思えば，いくつか違ったやり方をするでしょう。

上の引用で興味深いのは，リハーサルが即本番，卑俗に言えば〈ぶっつけ本番〉であったという告白で，いかにもケン・ロウチらしい演出手法の一つである。俳優（ときには俳優経験のまったくないずぶの素人）の自発的で自然な演技を尊重し，「リハーサル抜きの現実効果を生み出すドキュメンタリー・カメラの技法」[42]を持つ，と評される監督らしい仕事ぶりである。スタジオを離れ，ハンド・カメラで16ミリ・フィルムを撮るこのやり方を，ロウチ自身は「街頭での映画制作」（street filmmaking）と呼んでいた。

A：あなたの映画についての批判のひとつは，ドラマとドキュメンタリーとを混同しているというものですが，そうした批判にはどのように答えますか？
Q：ほんとうにお笑い種です。テレビでは毎晩のようにドラマ形式のドキュメンタリーがあるというのに，こちらは決して激しく攻撃されません。我々の映画は実話に基づき，登場人物は脚本があって俳優が演じます。ですから，映画の中身についてこれ以上明白なものはありません。それにもかかわらず，我々は映画の中の事実ひとつひとつを，台詞ひとつひとつを，守ろうとします。これこれのときにその人物が喋った台詞を正確にそのまま，というのではなく，人間関係や出来事をできるだけ忠実に表現したもの（representation）として，です。同じ議論が『隠された議題』公開時

にも起こりました。『タイムズ』紙は社説で，事実と虚構をこのような形でぼかすことは許されない，と書きました。その同じ週に『運命の逆転』（*Reversal of Fortune*）という映画が公開されましたが，これは女房殺しをしたと思われるクラウス・フォン・ビュロウという男の映画です。ジェレミー・アイアンズ主演で，クラウス・フォン・ビュロウなる登場人物と，グレン・クロウス演じる彼の女房役の登場人物が出演しています。その映画では，何が事実で，何が虚構なのでしょうか？ジェレミー・アイアンズがクラウス・フォン・ビュロウだったのでしょうか？わたしはそうは思いませんが，スクリーンにはたしかにクラウス・フォン・ビュロウが登場しましたし，そのことは議論の余地はありません。しかし，それでもちろん構わないのです。すべて架空の人物だったのです。ただ『隠された議題』では，イギリス人が北アイルランドでやらかしてきた策略のいくつかと，映画の中の出来事のいくつかが，かなり似ていたということであり，それが（『タイムズ』紙の言う）事実と虚構を混合するということだったのです。ですから実際，まったく欺瞞的な議論であって，そんなことをする人々が気付いているにせよ，いないにせよ，作品に真っ向から取り組むこともしないでその映画をひそかに傷つけようというやり口なのです。

簡単に補足すれば，1991年１月10日，『タイムズ』紙が「虚構の〈ファクション〉」（Fictional Faction）の見出しで掲げた社説に，ケン・ロウチ監督は同月22日の紙面で反論を寄せ，社説の執筆者が『隠された議題』における事実と虚構の問題を批判しながら，同様に「現実の出来事のドラマ形式による解釈」作品である『運命の逆転』にはまったく異議を唱えないのは，単に「一方の政見には反対し，他方には無関心」なだけだからである，と批判している。「作品に真っ向から取り組むこともしないで」とは，前述の保守党の国会議員スタンブルックが，映画を見ないうちから，「IRA 公式参加作品」と呼んだことも示唆している。（なお，faction は fact＋fiction の造語。）

(B) 1993年10月，来日時のインタヴュー

表記が不統一になるが，原文が入手できていないので，既にある翻訳[43]をそのまま引用する。

Q：様々な作品の中で，あなたは繰り返しアイルランドに関する問題に言及しています。特に「Hidden Agenda」は，カンヌ映画祭に出した時にイギリスの右派新聞から激しい非難を浴びましたし，フェスティヴァルからこの映画を取り下げるよう圧力さえかかったようですね。この作品もジム・アレンのシナリオでしたね。

K．L：私はアイルランド問題を避けて通ることは出来ないと思います。それに私の為すべき事は，自分の知っている事を機会あるごとに語ることなのです。メディアは北アイルランド紛争はイギリスの権力が戦うべきテロリズムの事件として扱っています。メディアは常にこの紛争について伝えていますが，決してその本質を伝えようとはしないのです。例えば，テロリズムについて伝えるとき話はいつもＩＲＡのことになりますが，しかしイギリスの警察や軍のために汚い仕事をする統一党員のテログループのことについては全く伝えられていないんです。

Q：「Hidden Agenda」はイギリスで激しい論争を引き起こしました。
K．L：まったく。この映画が出た時は激しい抗議の運動が起こったし，この映画はＩＲＡのプロパガンダであるとして新聞に取り上げられました。それで配給会社やほとんどの映画(ママ)［筆者注記：映画館］はこの映画を見ないうちから上映を拒んだのです。“反イギリス”というレッテルを貼られてしまうからです。後に，偶然ヴァリングトンの恐ろしい事件があった時にこの映画をテレビで放映することになったのですが，チャンネル４の上層部はこの映画をプログラムからはずしてしまったのです。いろんな論争がありました。私は逆にアイルランド問題を真剣に議論するまたとない機会だと思ったのですが。視聴者たちは放映取り止めに対して賛成や反対の手紙をチャンネル４に寄せました。結局，「Hidden Agenda」は放映されることになったのです。

この会見では，北アイルランド紛争を扱うイギリスのメディアがIRA非難に偏向している現実を均衡のとれたものにするために，イギリスの軍隊や警察，ユニオニストのテロも描いて，公平に紛争の「本質」に迫ろうという姿勢が表明され，タブー視せずに真摯に論議する姿勢の重要性が語られている。

(C) 1991年１月のインタヴュー

最後に短い談話をひとつ。イギリスでの映画公開に先立ってなされた会見[44]でロウチは，「マスコミの90％が敵対することでしょう。芸術映画評論家の間では，論争に直接関与することに二の足を踏む思いが強いでしょう。お高い自由主義者は敬遠したがるでしょう。そして人民主義的右翼がこの映画を気に入らないのは明らかです。となると，大変なことになりそうです。」と，激しい反発が待ち受けていることを予期している。しかし，〈政治的扇動家〉とレッテルを貼られることには嫌悪を示し，「政治問題と取り組むために映画を作っているという印象を与えたくありません。映画製作に私を引き寄せるものは，人間の経験に関する事柄や，人間関係を通していかに政治があばかれるか，を表現しようという願望なのです。それに，おもしろい物語を語るのも楽しみなのです。」

6．おわりに

北アイルランド和平交渉が，一進一退を繰り返しながらも，少しずつ進捗していることは慶賀すべきである。1990年制作映画『隠された議題』に描かれた1984年の紛争状況や陰謀工作はいまや遠い過去の絵空事に思われるかもしれない。しかし，必ずしもそうではない。和平交渉の進展の裏舞台で，テロ取締法案が拙速で可決されてしまった事実を看過してはならない。この法案の重要な点は，①捜査段階で被告が非合法

組織への所属を問う質問に黙秘していた場合，そのメンバーであると推定してもよい，②被告がメンバーであるという警察幹部の意見を証拠として採用してよい，という規定が盛り込まれたことである。黙秘権がなきに等しいほど制限されたうえ，警察側の一方的な意見が証拠採用されるようでは，とうてい被疑者の基本的人権が守られているとはいえない。しかも，この法案は，臨時招集された議会に緊急上程され，わずか２日で両院を通過してしまったのである[45]。複雑な政治的要因が絡んだ映画『隠された議題』の出発点は，〈民主主義国家イギリス〉において，囚人に対する拷問的取調べが行われていることを糾弾することだったことを思い起こす必要がある。政治犯と目された容疑者の人権が著しく狭められることは，あらたな拷問やそれに起因する冤罪の温床となる可能性がある。決して『隠された議題』を『忘れられた議題』にしてはならない。

注

1）使用したビデオ・ソフトは，New York の HBO Video 社発売。拙訳で引用した台詞末尾に映画冒頭からの時間（分・秒）を付記した。これはあくまで読者／視聴者の検索の便宜をはかる目安として挿入したもので，再生装置のカウンターによって多少のズレがあるかもしれない。ソフトの箱の表面には，映画には出て来ない情景のスチル写真――イギリス国旗ユニオン・ジャックで口封じの猿轡をさせれているジェスナー（マクドーマンド）の怯えた顔が，裏面にはオコンネル橋上で秘密警察がハリスを拉致する終盤の一場面がとられている。

2）David Thomson, *A Biographical Dictionary of Film* (London:André Deutsch, 1975), pp.447-8.

3）北アイルランド警察（RUC）や「英国空軍特殊部隊」（SAS）による「撃ち殺し」（“shoot to kill”）方針が問題化したのは1980年代である。SAS も建前としては，他の兵士と同様の戦闘規則の下で活動していた。すなわち，射撃開始は自己もしくは他者の生命が脅かされている場合に限ること，射撃前に警告を発することで生命の危険を招く場合には警告を発さなくともよい，などは SAS 以外の一般兵にもあてはまる規則であった。ただ，忘れてならないのは，SAS が射撃を開始する場合，それは負傷を目的とはせず，殺すことが眼目であったのであり，極端に言えば，選択的暗殺（selective assassinations）を意味していた。IRA によるテロ行為は非難されてしかるべきだが，対テロ部隊のこうした対応を見れば，現実に起きている事態は，もはや IRA の一方的なテロ活動というよりも，IRA と SAS 両陣営の戦闘状態という印象が拭えないだろう，という。[Peter Taylor, *Provos: The IRA and Sinn Fein* (London: Bloomsbury, 1997), p.268, p.121.] なお，SAS は空軍でなく陸軍なので，「特殊空挺隊」が正訳であるという。（林信吾『英国ありのまま』，中央公論社，1994/97, p.166.）

4）Chris Ryan, *The RUC 1922-1997: A Force under Fire*, revised edition (London:Mandarin, 1997), pp.344-53; J. Bowyer Bell, *The Irish Troubles: A Generation of Violence 1967-1992* (New York: St. Martin's Press, 1993), pp.719-20.

5）Kevin Toolis, *Rebel Hearts: Journey within the IRA's Soul* (London:Picador, 1995), p.184.（*Stalker*, p.49 から引用と注記）但し，*The RUC* では28年。

6）「撃ち殺す」の表現の由来は，1972年10月19日の英国下院の月曜クラブの集会（Monday Club meeting

in Commons）における，「前衛」（Vanguard）指導者ウィリアム・クレイグ（William Craig）の，次の演説の一節とされる。―― "We are prepared to come out and shoot and kill. I am prepared to come out and shoot and kill. Let us put the bluff aside. I am prepared to kill, and those behind me will have my full support."（「我々はとびだして打ち殺す覚悟ができている。私もとびだして打ち殺す覚悟がある。空威張りは脇へやろう。私は殺す覚悟があり，私の背後の人々は私の全面的な支援を受けるだろう。」）［*The Irish Times*, October 20, 1972.］この過激な暴言の真意を探るべく，酒に酔っての発言かと記者団が質したのに対して，彼の返答は "All I drink is an occasional glass of wine with a meal."（「食事とともにときたま一杯ワインを飲むだけだ。」）［*The Irish Times*, October 21, 1972.］と，素面の本音と断言した。［Conor O'Clery, *Phrases Make History Here: A Century of Political Quotations on Ireland 1886-1987* (Dublin: The O'Brien Press, 1987), p.147.］ちなみに「月曜クラブ」とは，マクミラン首相に批判的な保守党の議員たちが1961年に結成したもので，「非常なブリトゥン・ナショナリスト」で「帝国主義者」の集団であるとされ，1960年代末には重要なグループに成長したが，1972年に内部的意見の違いが表面化し，会員は減少して衰退したものの，1984年時点で会員2,000人，うち庶民院議員18人，貴族15人。［梅川正美『サッチャーと英国政治 1 ―新保守主義と戦後体制』（成文堂，1997年），pp.135-6.］したがって，1972年10月は内部抗争の時期にあたり，このクレイグ発言の背景には，尖鋭で突出した保守主義台頭の気運が読み取れよう。

7）イギリスの Security Services は Military Intelligence として公式には1909年に創設された。MI5（the Securiry Intelligence Service or 'molehunters'）は英国および英連邦を防御的に担当し，MI6（Secret Intelligence Service）は英国以外を獲得的（acquisitive）に担当する地域割がなされ，ともに Director General が統括するものの，担当地域割を反映して，MI5 は内務大臣（Home Secretary），MI6 は外務大臣（Foreign Secretary）に報告義務を負う。［Jock Haswell, *Spies and Spymasters: A Concise History of Intelligence* (London: Thames and Hudson, 1977), p.28. p.158; Martin Dillon, *The Enemy Within: The IRA's War against the British* (London:Doubleday, 1994), pp.181-2.］

8）Nicholas Comfort, *Brewer's Politics: A Phrase and Fable Dictionary* (London:Cassell, 1993), pp. 403-4.

9）この冤罪事件の6人の被告の一人の回想録である Paddy Joe Hill and Gerard Hunt, *Forever Lost, Forever Gone* (London:Bloomsbury, 1995), pp.68-77 参照。

10）「天声人語」，『朝日新聞』，1998年10月25日。

11）塚本勝一（かついち）『現代の諜報戦争』（三天書房，1986年），pp.54-58.

12）グイド・クノップ［永野秀和・赤根洋子訳］『トップ・スパイ』（文藝春秋，1995年）［原著名：Guido Knopp, *Top-spione*），p.153.

13）A.ギャンブル（Andrew Gamble）［小笠原欣幸（よしゆき）訳］『自由経済と強い国家―サッチャリズムの政治学』（みすず書房，1990年），pp.161-2.

14）ピーター・ライト［久保田誠一監訳］『スパイキャッチャー　下』（朝日新聞社，1996年）（親本・単行本の刊行は1987年），pp.280-1.

15）上掲書，p.288.

16）上掲書，p.290.

17）Bill Jones (ed.), *Politics UK Second Edition* (Hemel Hempstead, Herfordshire: Harvester Wheatsheaf, 1994), p.421.

18）Ian Gilmour, *Dancing with Dogma:Britain under Thatcherism* (London:Simon & Schuster, 1992), p. 202.

19) Ian Budge & David Mckay (eds.), *The Developing British Political System:The 1990s Third Edition* (London:Longman, 1993), p.113.

20) Colin F. Padfield, revised by Tony Byrne, *British Constitution Made Simple*, 7th edition(London: Heinemann, 1987), pp.283-4.

21) ちなみに1990年カンヌ映画祭のグランプリはデビッド・リンチ監督の『ワイルド・アット・ハート』，大賞は小栗康平監督『死の棘』，最優秀男優賞はジェラルド・ドパルデュー（『シラノ・ド・ベルジュラック』），最優秀女優賞はクリスチーナ・ヤンダ（『尋問』）だった。大きな賞をとらなかったせいか，わが国での『隠された議題』の扱いは，当然ながら以下のように，小さい。「イギリスのケン・ローチ監督「隠された証拠(ママ)」も，痛烈な政治風刺ドラマだ。北アイルランドの人権問題を調査中の活動家が殺される発端からサスペンスたっぷりだった。」（秋山登記者，『朝日新聞』（夕刊）1990年5月24日，p.21.）

22) *The Motion Picture Guide: 1991 Annual*(*The Films of 1990*), (New York: Baseline, 1991), p.79.

23) Hal Hinson, *Washington Post*, January 11 1991.

24) 元チリ大統領ピノチェトは1998年10月16日夜，脊椎ヘルニア手術で入院先のロンドン・ブリッジ病院でロンドン警視庁によって殺人容疑で逮捕された。1973年から83年末までの間，「左翼狩り」でスペイン系チリ市民80人を殺害した容疑で，スペインの裁判所のガルソン判事(Baltasar Garzon)から出されていた身柄引き渡し請求状に基づき，逮捕状を執行したもの。選挙で成立した当時のアジェンデ(Salvador Allende)社会主義政権を，陸軍司令官だった彼がアメリカ中央情報局（CIA）の支援を得て，73年9月11日の軍事クーデターで倒して権力を握って以来，17年間のピノチェト政権下の死者・行方不明者は約3,200人（うち行方不明1,102）に上るとされ，そのうち人権活動家の犠牲者数は70人を超える。それにもかかわらず軍事政権は1978年に軍犯罪をすべて免責する恩赦法を制定，つまりピノチェト自らが自らを恩赦するという「お手盛り」の極みをやってのけ，虐殺を法的に追及する道は，チリ国内では事実上，閉ざされてきたという(『朝日新聞』『日本経済新聞』1998年10月18日，*The Japan Times* 10月19，20日，『朝日新聞』「社説」10月22日)。このピノチェト逮捕に対して，現チリ大統領のフレイ（Eduardo Frei）大統領は「外交特権の侵害」としてイギリスに抗議表明した。1998年3月に陸軍司令官を退官したピノチェトは，軍政時代に制定された憲法の規定で大統領経験者として終身上院議員に就任しており，この議員特権のお陰で，犠牲者の親族から出されていた12件の訴訟をはじめとする国内の刑事訴追を免れてきたのだった（『日本経済新聞』，10月19日)。

拙稿との関連で興味深いのはこれに対するイギリス元首相サッチャーの反応である。逮捕の2週間前にピノチェトをロンドンの自宅で歓待したサッチャーは，『タイムズ』紙に投書を寄せ，1982年のフォークランド紛争のときにピノチェトがイギリスを支持したこと，逮捕によって現在の民主政権に軍部からの危険を招来する恐れのあること，次週に予定されているアルゼンチンのメネム大統領（Carlos Menem)の訪英中に隣国の元チリ大統領を拘留しておくのは不面目なことであること，などを根拠にピノチェトの即時釈放と本国への帰還を訴えている（*The Japan Times* 10月23，24日)。また，人権問題ではいつも積極外交を展開しているはずのアメリカは，内務省スポークスマンのルービン（James Rubin）が，今回の事件は関係国の政府と裁判所の問題であるとして論評を避け，煮え切らない態度を見せている（*The Japan Times* 10月21日）のも，ピノチェト軍事政権の樹立にアメリカが裏で支援した後ろめたい過去があるからに相違ない。一方，欧州議会はイギリスからスペインへのピノチェトの身柄引き渡しを要求する決議を圧倒的多数（賛成184，反対12，棄権14）で可決した。15か国中13か国が社会民主主義政権という欧州連合（EU）の勢力を背景に，保守政権のスペインに圧力をかけた（『朝日新聞』10月24日)。その後10月28日，イギリス高等法院はピノチェト側の主張を大筋で受け入れる形で，国家元首の逮捕は無効と判断，検察当局が上院に特別抗告，11月25日上院は逆転判決を出した。

25) アメリカの国際アムネスティが1977年はじめに出した「文書」に，*Desaparecidos: Disappeared in Chile* がある。[Robert J. Alexander, *The Tragedy of Chile* (Westport:Greenwood Press, 1978), p.345, p. 473.]

26) Mary Helen Spooner, *Soldiers in a Narrow Land: The Pinochet Regime in Chile* (Berkley: University of California Press, 1994), p.113.

27) Martin Holmes, *Thatcherism: Scope and Limits, 1983-87* (London:Macmillan, 1989/93), p.8.

28) アニバル・キハーダ・セルダ（大久保光男訳）『鉄条網の国——チリ軍事政権下の一政治犯の手記』（新日本出版社，1981年）[原著名：Anibal Quijada Cerda, *Cerco de Puas*, 1977.]

29) Hal Hinson, *Washington Post*, January 11 1991.

30) ダリフの他の出演作は *One Flew over the Cuckoo's Nest* (1975), *Ragtime* (1985), *Blue Velvet* (1986), マクドーマンドは *Raising Arizona* (1987), *Short Cuts* (1993), *Fargo* (1996) がある。

31) Joel Weinberg, "Loach Clips," *Voice* (November 27, 1990), p.110.

32) Steven Greer, *Supergrasses: A Study of Anti-Terrorist Law Enforcement in Northern Ireland* (Oxford:Clarendon Press, 1995) を参照。

33) 逆にIRA からイギリス諜報部への寝返りは，Martin McGartland, *Fifty Dead Men Walking* (London: Blake, 1997) [邦訳：マーティン・マガートランド（野沢博史（ひろふみ）訳）『IRA 潜入逆スパイの告白』（ぶんか社，1997年)]参照。山元修治『家族の肖像　密告—IRA テロリズムへの決別』（日本放送出版協会，1998年）も同じマガートランドが典拠。

34) Hal Hinson, *Washington Post*, January 11 1991.

35) Nigel Andrews, 'Thrills and spills', *Financial Times*, January 10 1991.

36) マーガレット・サッチャー（石塚雅彦訳）『サッチャー回顧録　上巻』（日本経済新聞社，1993年）[原著名：Margaret Thatcher, *The Downing Street Years*, 1993], p.501.

37) Iain Johnstone, 'Matching the nose with a rose', *Sunday Times*, January 13 1991, p.10.

38) Henry Boylan, *A Dictionary of Irish Biography*, Third edition (Dublin: Gill & Macmillan, 1998), p. 212.

39) *HC Debates*: Sixth Series: Vol.12: Col.427.

40) Richard Brooks, 'Time to go filming the great British taboo', *The Observer*, May 6 1990, p.55.

41) George McKnight (ed.), *Agent of Challenge and Defiance: The Films of Ken Loach* (Westport, Connecticut:Praeger Publishers, 1997), pp.164-5; pp.168-9.

42) John Caughie & Kevin Rockett, *The Companion to British and Irish Cinema* (London:Cassell/ British Film Institute, 1996), p.103. 本書だけがロウチの生年を1937年と記載している。

43) 映画プログラム「KEN LOACH」（シネカノン，1993年），p.11．インタヴューは1993年10月7日，東京・赤坂で行われた。

44) Allen Barra, "Belfast Calling", *Voice* (November 27, 1990), p.110.

45) ロンドン共同＝横川隼夫，『山陽新聞』（夕刊），1998年9月24日，p.4.